

Joel Beinin,

*Workers and Peasants in the  
Modern Middle East.*

Cambridge: Cambridge University Press,  
2001, xviii+207pp.

おおつかかずお  
大塚和夫

I

本書の著者 J・ベイニン は、アメリカのスタンフォード大学教授で中東近現代史の専門家である。これまでに刊行された主な著作として、*Was the Red Flag Flying There?: Marxist Politics and the Arab-Israeli Conflict in Egypt and Israel, 1948-1965* (University of California Press, 1990) や *The Dispersion of Egyptian Jewry: Culture, Politics, and the Formation of a Modern Diaspora* (University of California Press, 1998) がある。また、Zachary Lockman との共著として *Workers on the Nile: Nationalism, Communism, Islam, and the Egyptian Working Class, 1882-1954* (Princeton University Press, 1987) があり、同書の第 2 部「階級紛争と国民闘争, 1942-1954」をベイニンが主に執筆している。

一方、評者は社会・文化人類学の立場からアラブ・ムスリム世界を調査・研究してきた。したがって、中東近現代の政治・経済・社会史的研究としての本書の書評を書くのに適任ではない。だが、編集部からの書評依頼をお引き受けしたのは、本書のもつ独特の理論的姿勢に興味を引かれたからである。それは、これまでの中東の社会史的研究が、「人種、ジェンダー、エスニシティ、宗教、世代差、性的志向」といった「しばしば『文化的』とみなされるカテゴリー」(p. 2) に十分な注意を払ってこなかっ

たという反省の上にたち、インドの歴史研究から提起された「サバルタン」概念を積極的に近代中東史に適用しようという点である (pp. 3-4)。

インドのサバルタン研究は、みずから語りうる場をもたない「従属する人びと」の声に耳を澄ますことにより、「民衆史」研究に新しい次元を切り開き、その一部は「文化人類学の領域との創造的な対話が進む契機ともなろう」[栗屋 1988, 92] と評価されている。以下では著者の理論的立場や斬新と思える事例解釈の部分に焦点を絞り、本書を紹介しつつ論評を加えたい。本書の歴史学的評価に関しては中東近現代史の専門家にお任せしたい。

本書の構成は以下のとおりである。

序 論

- 第 1 章 世界資本主義市場，地方的体制，そして地元の生産者，1750-1839
- 第 2 章 オスマンの改革とヨーロッパの帝国主義，1839-1907
- 第 3 章 大衆政治の興隆，1908-1939
- 第 4 章 フィクリー・アル＝フーリーのマハッラ・クブラーへの旅
- 第 5 章 ポピュリスト・ナショナリズム，国家主導開発，そして権威主義的体制，1939-1973
- 第 6 章 労働者階級と農民層のポスト・ポピュリスト改革

このように本書は、序論と第 4 章を除いて、18世紀中葉から現在に至る中東（本書ではオスマン帝国とその後継諸国家、とくにアナトリア、大シリア、ナイル河谷、ティグリス・ユーフラテス河谷、アラビア半島海岸部を主に指す，p. 6）を政治経済的観点から 5 つの時代に区分して、それぞれの時代における「労働者」と「農民」のあり方を（地域によってかなりの違いがあることを再三注意しつつ）論じる。第 4 章は異色であり、下エジプトのマハッラ・クブラーに建設されたミスル紡織工場の労働者であり、活動的共産主義者であったフーリーの自伝（「マハッラ・クブラーへの旅」という題名）を考察したものである。サバルタン研究という面からみて

きわめて興味深いのがこの章の分析である。そこで以下では、(1)序論、(2)本書の説く近代中東政治経済史の5つの段階とそれぞれの時代における「労働者」と「農民」のあり方、(3)第4章、に分けて本書の紹介を行う。

## II

序論で説かれる理論的展望の一部はすでにふれた。サバルタン概念を導入する正当性に関しては、さらに次のようにも論じられる。これまでの中東史（さらには非ヨーロッパ世界の歴史一般）は、ヨーロッパ史を参照しながら、そこで用いられてきたカテゴリーに基づいて記述されてきた。そして、「歴史という知識のカテゴリーは、経済というそれと同様に、植民地時代において非ヨーロッパ人に強制的に課せられた近代性（modernity）、ならびに植民地的・ポスト植民地的諸国家の権力から逃れるすべがない。それというのも、歴史はほとんどの場合、近代的支配の構造、とくに国民国家の記録を用いることで書かれてきたからである。・・・サバルタン集団の諸歴史は、国家、社会的ヒエラルキー、ナショナルイストの神秘化の言説的権力を覆すのに有益である」（p. 4）と述べられる。

サバルタンの歴史を書こうとする者は、オリエンタリズム的な中東の「停滞史観」はもとより、伝統／近代の硬直した二元論に依拠して歴史を叙述する国民史や近代化論、さらに経済的下部構造や階級概念を偏重するマルクス主義史観などからも距離をとらなければならない。後二者は、評者の言葉を用いるならば、理想化された歴史の到達点（西洋的近代、国民国家、共産主義的社会）をあらかじめ設定した「目的論」的構成をとることになる。このような「目的論」的史観を批判し、サバルタンの実態に迫ろうとする本書では、エリートの歴史叙述そのものが歴史を構成する一要素、言説的な力とみなし、それ自体も考察の対象としている。

中東の近代は、ヨーロッパをイメージして、経済、政治、軍事、科学・技術、文化などを再編成しようとした派生的なプロジェクトであった。しかしそれ

は同時に、「みずからの社会を編成し直し、新しい社会的ヒエラルキーや社会闘争の場を創出しようとする、エリートやミドルクラスによって展開された言説戦略でもあった」（p. 9）。では、その意味での中東の近代の始まりはいつか。ヨーロッパとの関係における経済・政治的再編成の契機に着目する著者によれば、それは18世紀中葉であり、オスマン中央政府の弱体化、地方的名望家や豪族の勃興、ヨーロッパとの貿易の増加とそれぞれの地元に着目した経済成長、エリートによるヨーロッパ・スタイルや技術の自覚的採用の開始、国家の正当性に挑戦するイスラーム運動の台頭、などによって特徴づけられる（pp. 9-10）。それらの傾向が失せていくのが1820～50年代であり、地方的自治体制の衰退（エジプトを除く）、スルタンや官僚によるオスマン中央政府の強化、ヨーロッパへの経済的（一部ではそれに加えて政治・軍事的）従属、イスラームの改革・復興、ならびにヨーロッパ的考え方や文化に関する政治＝文化的議論、といった現象が顕著になってくる（p. 12）。本書第1章はこの時代を対象とする。

## III

1750～1839年と限定された第1章が論じる時代は、興味深いことに、オスマン帝国が「近代世界システム」へ編入された時期と重なるが、しかし地域的にかんがりの相違があったことがシステム論では見落とされている、と著者は批判する。

サバルタン論的観点から興味深いのは、1820年代初頭にレバノン山地で起きたマロン派を中心とした農民反乱の解釈である。ハーリク [Harik 1968] は、伝統／近代二元論に基づき、反乱の一部に「近代的ナショナリズム観念、公共的利益、個人的権利に関する最初のレバノンの表現」（p. 31）を見出した。だが著者は、その中に宗派的側面があることを指摘し、「それらの反乱は、増税に反対する限定された反乱であり、レバノン山地の社会構造に反対する革命ではなかった。フランスの共和主義的伝統に由来する観念や制度が用いられはしたが、それは宗派主義や、マロン派とドルーズ派との緊張の高まりと共

存していた。このことは、レバノンのナショナル・アイデンティティを推進するとともに阻害していた」(p. 31)と述べる。ほぼ同時代のパレスティナや上エジプトの農民反乱と同様に、この出来事を「初期ナショナリズム」と呼ぶことは、「農民の政治的受動性」を説く見解とともに、正しくないと彼は主張する(p. 34)。

「労働者」に関しては、この段階ではギルド職人が主流であった。ナーブルスでは石炭工業が盛んになったが、そこでは名望家が工場を支配し、労働者と工場側、労働者同士の争いなどはパトロン・クライアント関係を通して調停されていたこと、などがふれられる。

タンジマートの名で知られるオスマン帝国の法制・行政・財政の改革運動の盛衰が、第2章で扱う時代の特徴となる。この改革運動は、フランス革命の世俗主義と進歩観念によって鼓吹されたものでもあり、それによって中東の人々の言説に「市民」や「経済」といった新しいカテゴリーが登場するようになった。しかし、このような言説面においては前の時代と断絶しながら、「タンジマート時代は、オスマン国家の能力を再度中央集権化し、強化しようとする、エリートの以前からの努力が拡張されたものでもあった」(pp. 44-45)。

この章における興味深い歴史の解釈として、たとえば、1850年のアレppo暴動や60年のダマスカス暴動はムスリム対非ムスリムという本質主義的な原初的敵対関係から説明されることがあるが、むしろ世界資本主義市場に統合され、ヨーロッパ・キリスト教徒さらには帝国内の東方系キリスト教徒への優遇策を打ち出したオスマン政府に対するムスリムの憤りから生じたものとみなすべきであるというものがある。実際、大シリアではヨーロッパの政治・経済・伝道活動と結びつかなかったユダヤ教徒に対しては、ムスリムは襲撃をしなかったのである。また、ベアー [Baer 1982] やガーバー [Gerber 1987] による「農民反乱」の比較研究を評価しつつも、「彼らの弱点は、ヨーロッパの軌跡を規範的なものとみなし(たとえば、レバノンのキスラワンでの『革命』の先進性を、レバノンの『ヨーロッパ的』社会

編成に求めること—評者、以下同じ)、またおそらく彼らがイスラエル国民であるところから抱く、パレスティナ農民の集団行動の潜在的能力に対する不安に由来している」(p. 62)と述べる。

「労働者」については、この時期には「出現しつつある『近代的』労働者階級を形成する、新旧の社会構造、慣習、心性の混合物」(p. 65)がみられたと論じ、1882年のポートサイドにおける石炭運搬人のストライキの例をあげている。ロックマン [Lockman 1994] が指摘しているように、運搬人たちは出身地である「上エジプトの農民」に代わる新しいアイデンティティとして、みずからを「労働者」と自覚していたわけではなかったのである(p. 66)。

第3章で扱われるのは、青年トルコ革命(1908年)、エジプトのディンシャワーイ事件(1906年)、イラン立憲革命(1905~06年)を契機とし、西洋教育を受けたミドルクラスの専門家が社会に登場し、世俗主義、英国的自由主義、ナショナリズム、穏健な女性解放といった政治的プログラムが唱えられた時期である。だが、パレスティナのアラブ大反乱(1936~39年)のころに、これらのプログラムには陰りがみえだすのである。とはいえ、この時代に労働者や農民は、以前よりも政治の世界において「より顕著な存在感と言説的正当性」を獲得し、サバルタンは「近代的でナショナルな政治的主体(subject)」(p. 71)として迎えられることになった。

たとえば、エジプト・ナショナリズムの指導者の多くは西洋教育を受けた富農や村長層の子息、すなわちエフェンディたちであり、彼らはディンシャワーイ村の農民を「エジプト・ネイションの英雄」と称えた。また、ナショナリストや左翼の傾向をもつエフェンディたちは、エジプト農村の後進的慣習などを批判した農村小説を書いた。だが、「これら的小説には農民の肉声はほとんど含まれていない。・・・このジャンルは、エジプト・ナショナリズムの言説における農民の中心性ととともに、その言説のなかから実際の農民の肉声を排除することにエフェンディが成功したこと、その両者を表している」(p. 76)のである。

この時代には、むしろ労働者の活動が活発化してくる。たとえばエジプトの一部では、ナショナリストの働きかけにより、1910年ごろまでに異なったギルドの成員が「労働者階級」に属す「市民」という共通の意識をもつようになり、労働組合という新しい組織形態も設立された。

パレスティナのアラブ大反乱と、それに先立って農民・労働者を動員したポピュリスト的なイスラーム復興主義者、カッサームの活動の位置づけも興味深い。都市名望家・大地主・宗教者などのナショナリストは、大反乱やカッサーム運動のナショナリスト性を強調するが、カッサームのイスラーム的教え、農民の役割、農民と地主の葛藤、ドルーズ派との緊張関係には口をつぐむ。「ナショナリストの言説では、エリートもしくは生まれたばかりの左翼が近代性やネーションを代表するものであったが、彼らは農民の伝統主義や後進性を克服できなかった」(p. 97)のである。シオニストの標準的説明では、これらの反乱は「盗賊、暴徒、テロリストといったギャング」(p. 97)によるものとされる。著者は、スウェーデンバーグ [Swedenburg 1995] が刊行した記憶の民族誌によりながら、「アラブ大反乱はパレスティナ・ナショナリズムのひとつの表現であり、農民たちの武装行動は大反乱におけるひとつの中心的構成要素であった」(p. 98)と論じる。

英国風の自由主義が帝国主義の装飾に過ぎないと中東の人びとが考え出した1940年ごろから73年にかけての時代が、第5章で論じられる。農村の貧困化や農地分配の不平等が進み、中東各地の改革者や国際開発に関係する組織において「農民問題」が政治的アジェンダに取り上げられるようになり、一部で実際に改善されるようになった。政治勢力でもソ連の力が強まるとともに、左翼・マルクス主義者の活動が活発化して労働組合に浸透し、共産党も一部の地域で結成された。

植民地・半植民地主義的な旧体制を打倒したエジプト、シリア、イラク、アルジェリアにおいて、人民・耕作者・民衆階級などといった名のもとに成立したポピュリスト的体制は、階級・搾取・帝国主義というマルクス主義的用語を政治的言説に取り込ん

だが、実際には階級闘争を拒否し、コーポラティズムを好んだ。これらの体制の政治経済政策は、国家主導開発、農地改革、輸入代替工業化、公共部門労働者の社会的利益を背景にした「アラブ社会主義」、<sup>1</sup>「汎アラブ・ナショナリズム」であった。農業に関して、この体制は地主エリート層の支配を打破したが、その最大の受益者は富農・中農層であり、肥大化した農業官僚は貧農層を力づけるよりも、農村生活への国家の介入を増大させる方向へと進んだ。

公共部門労働者を重視するポピュリスト体制のもと、都市労働者は農民よりも利益を得て与党系の組合に参加し、一定の賃金を保証されるようになった。とはいえ体制は、労働者とともに農民を、国民の中心的構成要素として認知していた。左翼やマルクス主義者はこのような体制の中で政治的に周辺化され、そのなかでエリート層出身者は教育・文化の要職につき、労働者・農民の歴史学・社会学的研究を行い、労働者・農民を主人公とする小説や映画を制作することになった。マルクス主義者たちは「意図せずに、権威主義的ポピュリスト体制と共謀するようになり、労働者と農民を力づけるとともに、弱めることになったのである」(p. 141)。

国家主導の開発政策と輸入代替工業化は1960年代後半には危機を迎えた。労働者の中には急進化する者も出てきたが結局敗北し、国家は権威主義的ポピュリズムから反民衆的な官僚権威機構に移行するようになった。それが現代まで続く中東の政治経済潮流の始まりであり、第6章が扱う時代である。

1970年代中葉からIMFと世界銀行が推進した国際政治経済プログラム、すなわち輸出主導開発、民間企業重視、世界資本主義市場への統合といった新自由主義の方針が中東諸国に浸透しだした。このことは、中東の政治経済をめぐる学問的言説のレベルでも示されている。1990年に初版が刊行されたりチャーズとウォーターベリーの『中東の政治経済』[Richards and Waterbury 1990]には「国家、階級、経済開発」という副題がついていた。だが、1996年の第2版 [Richards and Waterbury 1996]では副題ははずされ、概念枠組みでも「階級」の代わりに「ソーシャル・アクター」という用語が使わ

れた。「これはマルクス主義的ドグマの残滓を払拭したものと理解できる」(p. 148)。

「ワシントン合意」と呼ばれる「安定と構造調整計画」では、基礎的消費財への政府補助金、社会的サービスに対する国家支出、公共部門への投資などの削減が大きな特徴となる。その結果、農村人口が都市に移動し、海外出稼ぎも盛んになり、国家収入における海外からの送金の割合が増加した。高い失業率も加わり、労働者と農民を社会的・政治的勢力として組織化することは困難になった。もちろん都市労働者の一部はこれらの潮流に対して抵抗を試みているが、新自由主義的潮流を逆流させることはできない。人口が減った農村では、前の時代に実現した土地改革に対する反動が起き、小農の利益が侵蝕される傾向がみられる。ワシントン合意政策からの「明確な帰結のひとつは、国家収入の再分配が、労働者や農民から取り上げられ、自営業者や会社に向かうことである」(p. 167)。

著者自身は、新自由主義的政策に批判的である。そして、ワシントン合意体制に対する民衆の闘争が進められているところから、「ほとんど反論されることのない(新自由主義政策の前提となる)拘束なき市場と私企業のイデオロギーの優位性は、特殊な限定された歴史的状況の産物であるということを示唆している」(p. 169)と本書を結んでいる。

#### IV

第4章の紹介が残っている。同章は、それまでの3つの章において、労働者や農民の肉声あまり聞こえてこなかったという自己批判的な文章から始まる。その理由のひとつは資料の欠如である。20世紀前半、識字力をもっていた数少ない民衆がみずからの経験を記す場合に大半の者は、モダニスト、ナショナリスト、宗教エリートの言葉や概念カテゴリーを使っていた。したがって、彼らは厳密な意味ではサバルタンと呼べないのである。

労働者が近代性のカテゴリー、制度、語り口を用いないで工場の日常生活を描写した稀なテキストとして、著者はフィクリー・フーリーの『マハッラ・

クブラーへの旅』をあげる。同書では、ナショナリストや左翼のエリートの「目的論」的な語り口をつまづかせるかのように、たとえばミスル紡織工場の労働者内におけるマハッラウィーヤ(マハッラ人)とシルカウィーヤ(会社人)の対立が記される。前者はマハッラ・クブラー地域の農民層から集められた労働者で、フーリーもその一員である。後者は他のさまざまな地域の農村から「会社」が雇ってきた工員であり、経営陣に対するだけでなく、同じ「労働側」であるはずのマハッラ人にも対立していた。つまり、1920年代では「出身地域に基づくアイデンティティが、階級やナショナルなアイデンティティよりも明らかに優先されていたのである」(p. 105)。

また、会社が女性労働者の雇用を決定したときには、ほとんどの男性はそれに猛烈に反対した。さらに、賃上げを求める最初のストライキのときに、会社側はそれを拒否し出来高払いを導入しようとしたが、労働側はそれに反対した。出来高制より日給(時給)制の方が有利であるというばかりでなく、働く者同士の競争よりも連帯を好んだからである。ただし著者は、これを「階級的連帯」ではなく、農民や都市ギルドの成員にみられた「モラル・エコノミー」の反映とみている。

興味深い挿話として、労働者に理解あるポーズを示す王族、アッバースの工場訪問があげられる。工場労働者を前にした挨拶で、彼はたどたどしい正則アラビア語を用いた。労働者たちは何を言っているのかよく分からず、外国語でも話しているのかと囁きあったという。アッバースはヨーロッパ暮らしが長く、ドイツ語の方が正則アラビア語より堪能だったが、「エジプト人」労働者の前なのでアラビア語を話したのだ。だが肝心の労働者の大半は口語アラビア語しか知らず、「国語」とされる正則アラビア語は理解困難だったのである。「労働者たちは、エジプトのカイロ中心のナショナルな制度、政府、政党、労働組合などをほとんど信頼せず、自分たちと一体感をもつものとはみていなかった」(p. 107)。

それでも1938年には同工場の労働者の集団的連帯が高まり、大規模ストライキが打たれた。スト指導者は裁判にかけられたが、その際に裁判官は、祖国

に奉仕し、その通商を発展させるために、労働者は会社に協力し、自己犠牲を払わなければならないと発言した。著者によれば、これが当時のエリートたちの労働者に対する本音であった。ミスル紡織工場を設立した財界人タラアト・ハルブは労働者の衛生と社会的条件の向上に努めていると発言していたのであるが、フリーの著作からはそれと矛盾した事例がいくつも見出される。実際、エリートたちによる「近代なるもの」の象徴としての工場の表象化は、フリーらの生活からまったくかけ離れたものであった。タラアト・ハルブのある著書に出てくる工場の写真には労働者が一切写っておらず、また当時制作された映画でもナショナリズムの高揚のために女性の労働者のポスが活躍するという、絵空事が描かれていたのである。

「エジプトの近代性は、その近代性を推進しようとするエジプト人および欧米人が『伝統的』、『後進的』、『前近代的』とラベル付けした態度や慣行を含んだ、ハイブリッドで混交的な現象なのである。……（フリーは）エジプトの近代性、経済的ナショナリズムの指導的な場に、サバルタンの存在、経験、意識を注入したことで、エリートやエフェンディが認めたがらず、また認めることができなかった、近代性の『不純な』性質、そして生産過程と社会的ヒエラルキーをめぐる日々の闘争を明らかにしたのである」(pp. 112-113)。

## V

最後に、本書全体に対するコメントを記そう。まず、近代化論や国民史、さらに通俗のマルクス主義のもつエリート主義的史観、すなわち近代以前から「国民」や「農民」、「労働者」などが厳然と存在しており、歴史の歩みとはそれらの社会的実体がみずからを実現していく過程であるとみなす「目的論」的歴史把握に対する批判は、本書ではかなり説得力をもって論じられている。その意味では、近代中東の政治経済史に新しい展望を開いたものといえるであろう。そして、当事者たちの具体的言葉使いや振る舞いに着目し、歴史学的言説も出来事に干渉する

ひとつの要因と捉えて考察の対象とする著者の理論的姿勢は、解釈人類学や反省的民族誌に関心をもつ者としては、共感するところが多い。

その一方で、「サバルタン研究」とみた場合、本書はどこまで成功しているのだろうか。たしかに、民族、エスニシティ、宗教、そしてジェンダーといった、サバルタン研究が重視するテーマはさまざまな個所で言及されている。それはきわめて参考になる。だが第4章を除き、本書では史料の直接的な解説作業はほとんど行われていない。議論の中心は、先行研究者の特定の歴史的事件に対する解釈とそれへの批判であり、その意味で2次の資料に依拠した部分が圧倒的に多い。

グラムシは「サバルタンの諸階級の歴史は、必然的に断片化されており、エピソード的」であり、したがって「モノグラフはこの（サバルタンの）歴史の探求にとって適切な形式であり、それは断片的な諸資料を広範に収集することが求められる」と述べている[崎山 2001, 26-27; グラムシ 1999, 110-111 参照, 傍点評者]。この指針を文字通り受け入れるのならば、そもそもサバルタンの「通史」を書こうとする試み自体が困難な作業なのかもしれない。

また、インドの「初期サバルタン研究」は、「男性」の眼差しのもとで、彼らの「批判対象であるエリート主義と同じく本質主義的実証主義的操作」[崎山 2001, 38]をサバルタンに対して加えていたと批判されている。そのために、スピヴァックによる「戦略的本質主義」という介入を招いたのである[崎山 2001, 43-53]。本書ではスピヴァックは2カ所(pp. 3, 98)で言及されているが、「本質主義的である実証史学」に対する認識＝政治的転回としての「戦略的本質主義」という契機にはふれられていない。その意味では、たしかにエリート主義的史観に対するさまざまな鋭い批判を含むにせよ、著者は農民や労働者を実体化＝本質化する、従来の「民衆史観」的パラダイムをどこかで引きずっていると思われる。

とりわけその傾向は、現代に近い、つまり「労働者」や「農民」という社会範疇が言説のなかで明確に確立され、組合などの組織化も現実的に進展する

時代の分析において顕著である。第5章、第6章で「労働者」が扱われる場合、政府に統制されることも多い、組合主流の活動に焦点があわされ、「労働組合史」といった印象を与えるものになっている。

また、評者の関心からいえば、宗教面の分析には不満が残る。たとえば、エジプトの下層労働者に広く浸透した「ムスリム同胞団」は、1942年のショブラ・ハイマの工場ストでは、政府と結びついてマルクス主義者に対抗したという一語で切り捨てられている (p. 126)。1977年のエジプトでの物価暴動時にはイスラーム主義的要素もみられた (p. 158) というが、それ以上追求されていない。また、ナセル時代に農村で「封建的大地主」に戦いを挑み暗殺されたある人物は、当初ムスリム同胞団員で、その後アラブ社会主義連合の活動家となり、公安からマルクス主義を広める者として目をつけられていたという (p. 134)。この事例などは、宗教勢力=右翼という単純な図式には収まりきらないものであり、サバルタンと宗教の関連性のある側面を明らかにできるものと思われる。だが、著者の分析はそちらの方向には進まない。概して本書全体において、著者は批判をしつつもマルクス主義に対しては好意的であり、逆にイスラームへの関心は乏しいように思えるのである。

#### 文献リスト

##### 〈日本語文献〉

粟屋利江 1988. 「インド近代史研究に見られる新潮流——『サバルタン研究グループ』をめぐって——」『史学雑誌』97(11) .

グラムシ, A. 1999. 『知識人と権力——歴史の—地政学的考察——』(上村忠男編訳) みすず書房.  
崎山政毅 2001. 『サバルタンと歴史』 青土社.

##### 〈英語文献〉

- Baer, G. 1982. *Fellah and Townsman in the Middle East: Studies in Social History*. London: Frank Cass.
- Gerber, H. 1987. *The Social Origins of the Modern Middle East*. Boulder: Lynne Rienner.
- Harik, I. F. 1968. *Politics and Change in a Traditional Society, Lebanon 1711-1845*. Princeton: Princeton University Press.
- Lockman, Z. 1994. "'Worker' and 'Working Class' in pre-1914 Egypt: A Reading." In *Workers and Working Class in the Middle East: Struggles, Histories, Historiographies*. ed. Z. Lockman. Albany: State University of New York Press.
- Richards, A. and J. Waterbury 1990. *A Political Economy of the Middle East: State, Class, and Economic Development*. 1st edition. Boulder: Westview Press.
- 1996. *A Political Economy of the Middle East*. 2nd edition. Boulder: Westview Press.
- Swedenburg, T. 1995. *Memories of Revolt: The 1936-1939 Rebellion and the Palestinian National Past*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

(東京都立大学人文学部教授)